

ウクライナ避難者支援

のための情報共有会議

— 第17回議事メモ

日時：2023年10月20日（金）18:30～20:30

場所：オンラインzoom

参加者：23名

* 団体、個人名については敬称略にて掲載しております。

Supported by



THE NIPPON
FOUNDATION

「あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク」近況と開催趣旨

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク／認定NPO法人レスキューストックヤード(RSY) 代表理事 栗田暢之

●当ネットワーク活動の近況について

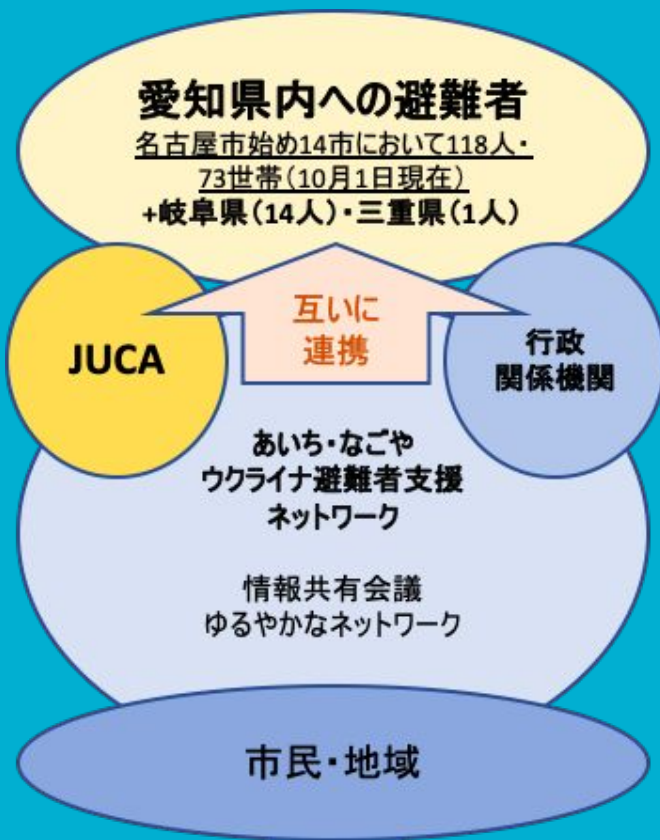
・10/15に名古屋グランパスの試合に招待を頂いた。若い世代や普段のイベント招待にいらっしゃらない方が参加されたことが良かった。募金にも多大なご協力を頂いた。

・当団体のスタッフが避難者に呼びかけ「天白区民まつり」15人程が出演することになった。「ふるさと」など日本の歌も歌う予定で熱心に練習されている。

●現在118人、名古屋市始め14市に73世帯(10月1日現在)の方が愛知県に避難されている(右図参照)。東日本大震災の経験では、一定の時期に避難が増えていたが、ウクライナについては年間を通して転入がある。さらにここに来て名古屋市に転入・転居する人が増えてきており、家具の調達や引っ越しや物資の確保がずっと続いている状況。「避難者一人ひとりのいのち・暮らしが守られること」という目標のもと、できる範囲の支援をしている。ただ、名古屋市からの受託によるマッチングに関して、支援に限りがあることも否定できない事実。一方、情報発信する場としての本会議は非常に重要と感じており、会議を通じたゆるやかなつながりの中で、被災された方のニーズに応じた支援を続けていきたい。

●本会議は、一人ひとりの暮らし・命を守るためにどういった支援が必要か、そのためにはどうしたらよいかを情報交換することを目的に、月1回程度開催している。緩やかにつながり、ニーズに応じた支援を共通の着地点にしたい。官民連携で、できないことはカバーしあい、横の連携を広げることによって、避難者一人のために力を合わせる事が大事。

●11月に「大交流会」を行う。現在避難者9名から申し込みを頂いている。避難者の8割以上が参加することとなり、気を引き締めて準備を進めているところ。



自治体、支援団体からの報告と質疑

あいち・なごウクライナ避難者支援ネットワーク／認定PO法人レスキューストックヤード 加藤絢子

◎ネットワーク

- * 物資の受け取り・お届け(冷蔵庫・洗濯機・タンス・テレビ・電子レンジ・ベッド他生活用品。お米・果物・冷凍食品・調味料・菓子類・雑貨類等)
- * 愛知県商業高校文化祭繋ぎ(UUCAへ) * 在留資格更新 * 各種相談対応 * イベント・交流会(下記参照)

◎名古屋市委託事業

- * 支援登録窓口問い合わせ対応 * 個別訪問 * 各種相談対応 * 託児・通訳
- * 市営住宅の内見と契約の同行 * エアコン設置・ガス開栓の立ち合い
- * 物資提供:生活用品・コート・リュック・軽食等 * 調達した家財の運搬

- ・名古屋に転入される方が増加しており、家財の提供、運搬、物資の提供等、ボランティアに大変ご協力を頂いている。
- ・愛知商業高校文化祭出展については、文化祭で避難者の方が作った商品を売っていただき、売上を寄付頂くという繋ぎを行った。
- ・バンドウーラ奏者カテリーナさんのコンサート招待(10/8)
- ・グランパスの試合観戦(10/15)について。先方から大きなご協力をいただき、試合会場の2箇所募金活動を行うことができた。避難者自身が募金の呼びかけが慣れていて、多くの募金を集めることができた。後日、避難者家族から「スポーツを通じて誰かを応援する素晴らしさを感じた」という感想もあった。
- ・(レスキューストックヤードスタッフ 堀田の報告)「天白区民文化祭」にウクライナ日本合同合唱団という形で出演することになった。避難者に呼びかけたところ、意外にも15名ほどが集まり、楽しく練習をしている。ウクライナの方は集まると自然に歌が発生するような、歌が好きな民族だと思う。イベントの時に、一人が歌うと自然発生的に大合唱になったこともあり、それをみんなに聞いていただきたいということで、文化祭に出ることになった。『ふるさと』は簡単に歌えると思っていたが、ウクライナの方にとっては発音がかなり難しいらしく、うまく練習が進まないこともある。選曲について熱い議論となっている。今まで避難民として招待されたり指導されたりすることは多いが、自分たちで創造するという機会があまりないので、とてもみなさん意欲的になっているようだ。1月に発表があるが、仕上がりが楽しみである。

自治体、支援団体からの報告と質疑

●あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク／認定PO法人レスキューストックヤード 加藤絢子

【個別相談】

- * 購入または提供された家具の運搬依頼
- * 病院の予約と同行依頼
- * 市営住宅について入居に伴い家具家電の調達
- * 自転車の防犯登録に同行依頼
- * 各種必要書類申請の補助
- * 海外送金について
- * 届いた郵便物の内容を教えてほしいまたはその対応
- * アルバイトの申込補助(問い合わせ・履歴書作成)※問い合わせができるほどの日本語の会話が難しい
- * 引っ越しに伴い、水道ガス電気の開栓閉栓・不足してる生活用品の買い物同行 等

【課題】

- * 市営住宅入居に伴う家具家電の調達
- * 体調不良や持病について
- * 経済的不安→就労できていない・転職したい
- * 低年齢児や高齢者以外の支援の不足
- * 心的ケアの必要性
- * 子ども:本国での教育の継続と外出不足について

* 新規支援者登録の減少:登録総件数:企業・団体:63件(0)、個人:176件(0)
マッチング総件数:企業・団体92件(+5)、個人:138件(+3)

・支援登録窓口の問い合わせは、新規の登録は0件だった。関心が薄れているのが大きな課題。マッチング件数自体は、継続して協力いただける方がありプラス5件だった。(物資提供、運搬)

・長期化に伴って、体調不良や持病を訴える方が徐々に増えている。元々の病気の薬がきれてしまい、薬だけでもほしいという相談。心的ケアが必要だが母語での説明が重要。また、精神的な病状を説明する際に、個人的な会話をする必要があるが、通訳の関係でなかなか難しいので、悩んでいるところ。

ウクライナ避難者支援「大交流会」について

●あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク 向井忍

- ・11月18～19日に西尾市のホテルにて実施する。
- ・現在、避難者・身元保証人含め、99名(40世帯ほど)からお申し込みいただいている。泊温泉でゆっくりしていただくということや歌などお楽しみ企画がある。
- ・他に、避難者の方々が1年以上日本で生活をする中で、困っていることや悩みがあるのではないかとということで、「相談コーナー」の時間を設けた。実際にその場で悩みを解決することも大事だが、さらに、協力してくれるたくさんの専門家の方の存在をお伝えし繋いでいくこと、専門家に相談に応じていただけると避難者に実感して頂くことである。
- ・事前に避難者にどんな困りごとがあるか聞いたところ、一番多かったのは、体や心の健康、仕事やお金、日本語のことで16名、18名、19名。他に生活の手続き、子育てなど。
- ・それぞれの困りごとに対し、多くの専門家にご協力頂けることになった(名古屋入管、司法書士、愛知県臨床心理士会、医師、産業カウンセラー、日本語教師、名古屋国際センターの相談員など)。ただし、グループに通訳は1人ずつ程度になる。グループで説明を聞いてお話を聞いた後、必要な場合は個別相談になる。あと1ヶ月少しだが、具体的な相談内容をもう少し把握して、的確に相談に対応できるようにしたい。
- ・ボランティア協力いただけるという連絡を頂いた方にもお礼申し上げたい。引き続き準備をしっかりと進めていきたい。

JUCA(NPO法人日本ウクライナ文化協会)

理事長 川ロリュドミラさん、副理事長 榊原ナターリアさん

・秋に入りたくさんのイベントに参加。避難民が作った商品をバザーで売ってウクライナへ支援をする。新しく作品を作ってくれる避難者が増えて、多様な商品が出てきた。名古屋市と協働し、毎月10日の「ヒサヤママーケット」も出展した。来年はどうかまだわかっていないが、いい取り組みとなっている。避難者が売り手になるので、お客さんと会話ができる。自分で勉強した日本語を使うことができる。どんな場面でどういうことを言うといいか、日本語を勉強できる機会にもなっている。名古屋市に新たに引っ越してきた人も参加している。11/3は鶴舞公園、11/4は椿町@名古屋駅、11/4-5東海市国際まつりがあり、手分けして参加する予定。

・子どものオンライン学習サポートを続けている。小学年生2人と、中学1年生1人が参加している。「にわとりの会」による日本語学習で、子どもたちがもっと学校で友達と会話ができるように、勉強ができるようにと思っている。JUCAメンバーが通訳をしながら手伝っている。3ヶ月ごとに期間を区切って行なっているが、来年も子どもたちの様子を見ながらニーズに応じて継続の有無も考えていきたい。

・ニトリの仕事について。たくさんの避難者の就労が0月から始まっていて感謝している。川ロリュドミラさんが毎回オリエンテーションや面接に出向いて通訳サポートをしている。ニトリで働きたい人がとても多く川口さんが大変忙しいが、店へ出向いてサポートしている。

・他市から名古屋への転入が増えていてJUCAもRSYも引っ越しや荷物の搬入、搬出のニーズが多く非常に忙しい。家具家電等の寄付をお願いしたい。

・月に1回のウクライナランチショップは11月も実施する。10月は24日に開催する予定なので、ぜひ予約頂いてお越しいただきたい。

自治体、支援団体からの報告と質疑

<名古屋出入国在留管理局 在留支援部門 高島さん>

・本日午後に「補完的保護対象者制度」についてIP上にアップされた。

https://www.moj.go.jp/isa/applications/procedures/07_00038.html

・制度は12月1日開始。「補完的保護対象者」とは「本国に帰ると迫害のおそれのあるから帰れない人」。「迫害を受ける恐れ」とは『難民条約でいう人種・宗教・国籍・特定の社会的集団の構成員または政治的意見』のいずれも該当せず、別の事情があるから本国に帰れない人」のこと。この対象者を政府として保護しようという制度である。

・具体的には、国に帰ると戦争に巻き込まれてしまって命がなくなってしまうという状況がある人をイメージしている。今のところはさらにどういう人が該当するかしないかというカテゴリーは発表されていないので、まだわからないのが現状である。

・手続きについて。通常の在留資格の延長などと別の手続きになる。保護対象者の認定手続きをしている間に、在留資格の有効期限が切れる場合は、まずは在留資格の延長をして頂く必要がある。(補完的保護対象者は在留資格ではない)

・「補完的保護対象者」として認定された人に対しては、在留資格の「定住者」が与えられる。「定住者」は本邦での居住を認める在留資格なので、活動に制限がなくなる(犯罪以外は何してもいい)。働く内容は何でもいい。自分で経営も可能。

・補完的保護対象者認定された人に対する参加任意の「定住支援プログラム」が用意される予定。を行う予定になった。具体的には、日本語教育、生活ガイダンス、場合によっては宿泊施設を提供したり、場合によっては生活費支給も予定されている。詳細は以下URLにあるWEBサイトにて確認いただきたい。

<https://www.moj.go.jp/isa/content/001403710.pdf>

<https://www.moj.go.jp/isa/content/001403705.pdf>

取材を通して感じること

読売新聞 栗田睦子さん

- ・昨年9月から名古屋に配属になった。
- ・初めて取材したのはコロナ・エリザベータさんのメタバースを使った就労支援の取り組みのことだった。その後も各イベント等や避難者支援の取り組み取材し、(読売新聞が発刊している)英字新聞での掲載も含めて情報発信をしている。
- ・取材をしていて感じることは、避難者が時々いい笑顔を見せてくださることが印象的。
- ・先程心理ケアの必要性の話があったが、ウクライナデーや演劇の取材を通して感じたのは、みなさんが得意なことや好きなことを活かして、それがウクライナの支援に繋がったり、ウクライナ人同士や日本人との交流にも繋がっていること。避難者の一人が練習の時にすごくいきいきしていてウクライナの写真を見せてくれたこともあった。そうした好きなことなことで集まったり機会をどう作るかが大事だと思った。
- ・情報共有会議に参加して、関係機関や自治体、支援者が参加しているので、今何が問題になっているか、困っているか、これから課題になるであろうことが知ることができる。名古屋は良い取り組みをしていると感じている。
- ・毎月テレビ塔で開催されているスタンディングアピールも取材している。これについては、避難民のみなさんの声をもう少し聞けたらいいなと思っている。今どう思っているかをアピールできる機会にしていただけるとよいのでは。記事としても取り上げていきたい。
- ・避難者の皆さんと顔が繋がってきて、街なかでお会いする際に、カタコトで挨拶をできるようになってきた(スーパーで研修中の名札をつけた避難者さんと挨拶をしたこともあった)。
- ・司会より:メディアの方のご意見は支援者と違うので、息の長い支援を続けていくためにもお話していただく機会を作りたい。

避難者に関すること、今後の課題

名古屋テレビ 川村真司さん

<ウクライナ報道を通して>

- ・情報共有会議は1回目からずっと参加している。この1年半報道を通じて振り返ってみたことをお話したい。
- ・プロフィール:今は名古屋テレビでフリーランスのディレクターとして勤務している。2003年より、報道勤務で遊軍を主に2011年から防災を担当していた。テレビ局の局員ではなくフリーランスである。
- ・2022年ウクライナの全面侵攻が始まった時、これは戦争に関する報道がこの地方でも無縁ではないと感じた。東京のテレビ朝日では現地の報道がある中、国内では在日のウクライナ人やロシア人への取材が求められていた。名古屋に縁のあるウクライナ人にコンタクトをとって取材をしようとしたが、恥ずかしながら名古屋にウクライナ人がいるかどうかすらわからなかった。ロシア人がいることはわかっていたのでロシア語教室、飲食店等にコンタクトをとって取材をしようとしたが取材は全て拒否された。
- ・JUCAが名古屋にあることがわかったが、その頃は、JUCAのメンバーも家族、友人の安否確認で不安な日々を過ごしている様子。連絡することができなかった。その時にSNSで集会があることを知って取材に出向いたのが最初だった。各社同様で取材をしたが、本国の人と連絡を取りたいのに取材で時間を取られるのは困ると怒られ、まずは関係を築きたいと考えた。メールアドレスを聞いて、時差を考えながら電話し、細い線をたどりながら関係作りを深めていった。この時はこれからどれだけ大変になるか覚悟はできていなかったが、その後、避難者受け入れを政府が表明、取材への覚悟をしなければと思った。原則男性は出国できない、年齢制限もあり、女性、高齢者、子どもが入国することがわかった。報道各社とも飛行機が空港に何時に着くかを調べて、SNS発信の情報をチェックしながら、入国の機会を逃さないようにしているようだった。行政やNPO、名古屋市のつどいの場などで、1人1人接触していく。取材をするにあたり、戦争当事者の人たち(JUCAももちろん当事者)にどう取材をするのか、どう聞いたらいいのか、ましてや言葉も通じない。コミュニケーションの方法を考えた。また、過去の震災取材の経験から、子ども達のことが気になった。

避難者に関すること、今後の課題

名古屋テレビ 川村真司さん

・私は、東日本大震災の取材も長くやってきており、トラウマを抱えていることはすぐに想像がついた。東北では高齢者は積極的に話しかけてくれる人は多かった。被災をした、失った人のことを聞いてほしい、と訴えかけてくる。その後ろで遊んでいる子ども達の無邪気さが気になっていた。子ども達も同じ体験、同じ空気を吸っているから何も知らないわけではない。取材にいったある小学校のスクールカウンセラーは「低学年の子どもは言葉の表現が未熟で心の中に溜め込んでしまう。高学年は話ができるが、中学、高校になると言わなくなってしまう」と話した。子どもに対して気をつけなければと思った。喋れないから、まだ小さいからという子どもが、大きくなって言葉の表現が出来るようになると、「なんでそんなこと知っているの？」ということ突然言い出すこともあると言う。大人と同じ景色を子どもも見ているということ気をつけなければいけない。ウクライナの子ども達の姿を見て、その時のことがだぶっていた。みな戦争のトラウマを抱えている。今より3ヶ月後、1年後、どうなっていくかを考えると、この時どう話しかけるべきかを考えなければと思った。

・子どもを取材する時に、直接戦争の話、家族の話はしない。「お父さんは？寂しくない？帰りたい？」とは聞かないようにしている。ぬいぐるみを抱えている子には「そのお友達はなんていう名前？」。女の子には「桜は見た？」と話を聞く。また、日本語ができる身元保証のご家族に話を聞くというだけに留めた。放送に対して視聴者は子どもは「可愛い」、「こんなに小さい子が頑張っている」という印象を持つが、視聴者のために『可哀想な人』と描かないように心がけた。

避難者に関すること、今後の課題

名古屋テレビ 川村真司さん

・取材をすると折り合わないこともある。途中で気がついたことはすぐに戦争が終わって帰ることができると話す人が多いということ。だんだんいつ帰国できるかわからないということがわかってきたなかで、仕事をしなければいけない、学校はどうするか、仕事をして母国になんらかの形で支援をしたいと思いが募る。ということが課題として見えてきたと感じた。そうすると、多くの人たちが支援に頼るばかりではなく、自立した生活、人間の尊厳を大事にしたいと思っている。という話も伝わってきた。その気持ちがわかる。そういったところを支援の中でうまくカバーしていかなければならない。ただただ避難者の境遇を取材するだけではなく、それを見た日本人たちが自分にできることは何かを踏み出せるような報道をしなければと考えるようになった。

・避難者の本当の姿を取材するとは何か。実際に避難者の方々と話をしていると料理が上手、民芸品が作れる、学校の先生、ちゃんとしたその人の力、能力がある。それを活かせるようにすれば心が前向きになる、私たちともよりコミュニケーションが交わせるのではないだろうか。マルシェや料理教室を取材するとその人の本来の姿を垣間見ることが出来る。そこから多くの人生を翻弄する戦争の凄惨さがわかるのではないだろうか。

・過去にも戦争の翻弄されてきたウクライナ人を取材させてもらった。11月末にあったソ連が行った残虐な行為(ホロドモール)について、取材したこと。クリスマスも本来ウクライナ正教では1月だったが、侵攻後は西欧に合わせて12月にしようという動きがあること。また、イースターの話取材する中で文化や歴史背景により触れることができるようになった。

・避難者の皆さんは、故郷はどうなるのか、自分の運命・人生がどうなるのかと2つの問題を抱えながら生きている。若い人と話した時に、戦争によって自分のやりたいことができなくなることに苦しんでいるようだった。戦争という現実はあるが、戦争に翻弄されず自分の人生はきちんと歩みたい、と強い意志を感じる。そこをどう私たちは取材するか、支援側はサポートを続けるかと思う。

質疑応答

Q. ウクライナ避難民の在留資格が「定住者」に変わると仕事の制限がなくなると聞いた。避難民がウクライナ居住時の元職が活かされると就労意欲が湧くかもしれない。民間企業、例えば、リクルートエージェントなどに相談に行き、仕事を紹介してもらうことはできるのか？過去に自分も強みや経験を一緒にカウンセリングしてもらった経験がある。若い人であれば、特に自分のやりたいことがわからないという場合があると思うので、そうしたサービスを利用できるとよいのではと思う。

A. ・就労制限が一切なくなる。本人が様々な就職斡旋業者などから就労先を探すことも可能。国としては、ハローワークが職業案内をしているが、ウクライナ避難民専用のホームページもあるので、活用していただきたい。

・ハローワークのジョブカードシステムを利用し、その人のスキルや経験の棚卸しをしながら職探しをすることができる。ウクライナ語の通訳が必要であれば、外国人雇用サービスセンターの利用をするとよい。ウクライナ語の通訳も、ジョブカードシステムの利用も事前予約必要なので、必要な方がいらしたら問い合わせをしてほしい。

・一人ひとりに合わせたキャリア支援、相談の場が必要という視点は、日本財団のシンポジウムでも話題になっていたところと合わせてのキャリア支援や伴走支援によって、自分のバックボーンを活かすことが、ウクライナ帰国後の生活にもつながることもある。

・読売新聞の栗田さんより。広島でゼレンスキー大統領に話をした被爆者小倉桂子さんをモデルにした紙芝居「ケイちゃんの消えない雲」をウクライナ人美術家のユリア・ボンダレンコさんが作成した。ウクライナ語、英語、日本語もあり、ネット上で読むことができるので、ぜひ御覧いただきたい。

ブレイクアウトルーム共有

●各ルームでの話し合い内容は概ね以下の通り。

1. 大交流会や支援活動について

- ・各地で紛争が起きている。ウクライナを含めてどんな支援ができるのか。
- ・1年半経ち、楽になってきているのか、課題が大きくなっているのか、自分達の支援がかみ合っているのか等、丁寧に見ていかなければならない。大交流会は大切な場となる。
- ・障がい者はいらっしゃるか。本国でも状況はどうなのか？
 - ・避難者にお一人いらっしゃることを把握しており、障がい者手帳の取得手続きを進めている。
 - ・国によって認定制度が異なることにも留意する必要がある(ウクライナでは認定されないが日本では認定される、またその逆)
 - ・きょうされんは、身体、精神、療育など幅広く関連施設を持っていらっしゃるので、今後アドバイス頂きたい。

2. 避難者の現状について

- ・刺繍の会に参加している年配者の会話はロシア語。日本語の習得は難しい。思春期の子は言語の違いにより、遊ぶ時を含めて心配だという話が出た。高齢者は日本語を話すことは難しくても聞くことはできるという方が増えているようだ。チェルノブイリ支援の経験から、出身地によりウクライナ語文化圏、ロシア語文化圏という地域事情があるので、なかなか難しいと思うが、戦争が終結した際にはきっと今よりもウクライナ語の重要性が増すだろう。ウクライナに帰国する際には、ウクライナ語を勉強する必要が出てくるのではないかと。
- ・栗田さんより。日本にいてもウクライナにいても仕事ができる、ジョブマッチングプラットフォームのようなシステムを友人が開発している。好事例が数件出てきたら紹介したい。

ウクライナ避難者支援のための寄付にご協力をお願いします

郵便振替00810-7-215694 口座名義:レスキューストックヤード

(ゆうちょ銀行以外の金融機関からのお振込み)

ゆうちょ銀行(金融機関コード: 9900)・〇八九(ゼロハチキュウ)店(店番: 089)

当座 0215694 口座名義:レスキューストックヤード

※領収書は認定NPO法人レスキューストックヤードからの発行となります。